小金井市男女共同参画情報誌

for the people Koganei

2011 Autumn No. 34

かたらい

特集 女性と防災

東日本大震災後の
福島県相馬市原釜漁港
（平成23年7月29日撮影）

特集 女性と防災

2011年3月11日の東日本大震災の日から、半年以上が過ぎています。

それにしても、復興とは言え、まだがれきを整理しただけで、何も決まっていません。地盤が沈下した所もあり、以前と同じようにはいかないと思います。地域の特性もあると思いますが、今回の地震では、女性が実際は活躍しているのに、なぜかテレビに映るような人達、自治会や復興委員会の人達は、男性が多いのです。この事は、復興に妨げにならないでしょうか。女性と災害は重要な問題だと思います。そこで、今回は特に女性に焦点を当てて、この問題を追ってみました。また、小金井市の防災も考えてみたつもりです。皆さん、ご一緒に考えてみませんか？（佐）

つなぐ・結ぶ 支援の環

萩原なつ子

萩原なつ子さんプロフィール
立教大学社会学部社会学科および21世紀社会デザイン研究科教授。
日本NPOセンター常務理事。専門は、女性学、環境社会学、非営利組織論ほか。東日本大震災後、被災地入りし、被災者の支援や現地の調査をした実績がある。2001年4月～2003年3月まで、宮城県環境生活部次長として勤務。

あの日、私は大学の研究室で、新しい研究棟への引っ越し準備をしていました。古いレンガ建て校舎の窓が、突然、「カタカタカタッ」と音を立て始めました。おかしいな？今日は、風は吹いていないはずなのに、と思ったその瞬間、大きな揺れが襲ってきました。本が飛び出し、書類が崩れました。揺れがおさまらないので、携帯電話だけ持って外に飛び出ました。携帯を持つ手が震え、ベンチに座り込んでしまいました。

私は2001年4月から2年間、宮城県環境生活部次長として勤務していたので、テレビに映し出される第2の故郷の惨状にただただ驚き、友人にメールを打ち続け、安否の確認を試みました。気仙沼市や石巻市の友人と連絡が取れ始めたのは、地震から3週間を過ぎた頃でした。私の個人的な被災地の女性たちへの支援活動の始まりは、「ご遺体を包むタオルが欲しい」という仙台市の友人からの一本の電話であり、「ご相談があります」という登米市役所の友人から届いた一通のメールからでした。登米市役所の三浦徳美さんからメールが届いたのは、5月5日のことです。当時南三陸町で被災した住民1000人が登米市で避難所生活をしていました。「先日避難所に出向き、女性たちの方々に今困っていることなどのお話をお聞きすることができました。そうしたところ、声に出せない声を聞くことができたのです。女性たちに必要なものが届いていません。避難所がこんな状況だとは知りませんでした。」メールには女性たちが必要としている物資のリストが列挙されていました。基礎化粧品や眉墨などは、おそらく「この非常時にぜいたくだ」という声にかき消されてしまいます。コンパクトミラーや裁縫箱は現場の声を聴かなくてはわからないニーズでしょう。

すぐに三浦さんに電話して、二つのお願いをしました。一つは、地域の女性たちを組織化し、任意団体を立ち上げること。支援物資や支援金の受け皿となるだけでなく、行政や企業、NPOなど、他の主体をつなぐ役割を果たすことが期待できます。二つ目は企業等に支援を要請する際に必要となる書類の作成です。三浦さんの行動はとても速く、一週間後には任意団体「えがおねっと」を設立し、企画書も私の手元に届きました。その間、私は人的ネットワークを活用して、物資の調達に向けて動き始めていました。人から人へ、人から組織へと思いが伝わり、つながりがつながりを創発して、支援物資が登米の被災者に届けられていったのです。現地でお会いした被災者の女性が、裁縫箱を開けながらお孫さんに向かって「ボタンつけてあげられるね」と語りかける姿を見て、思わずもらい泣きしました。

では、なぜ「えがおねっと」が短い期間で設立できたのでしょうか。どうして多くの企業や個人が迅速に支援してくれたのでしょうか。登米市は4月に男女共同参画推進条例を策定していますが、男女共同参画策定委員の存在が大きな力となりました。また後方にある登米市役所の存在が「信用支援」となり、「えがおねっと」への信頼につながりました。平時からの男女共同参画の取り組みや多様な主体のネットワークが、緊急時の女性被災者支援のためのノットワーク（問題を解決するために個人や組織を結ぶこと、結び目づくり）の形成に力を発揮したのです。大事なことは、発災後速やかにジェンダーの視点に基づいて現場の声を拾い上げ、きめ細かい支援を行うための仕組みを平時に作っておくことです。そしていつ何時襲ってくるかもわからない災害に対して、老若男女を問わず、各人が日常生活の中で災害に対してのリスクセンスを磨いておくことが何よりも求められる防災対策ではないでしょうか。

女性視点での被災者支援
～笑顔と生きる力のために～

三浦徳美

3月11日に発生した東日本大震災から半年が過ぎました。この半年間で災害支援の形は大きく変化しています。緊急時の生存確保のための支援から、日常生活を取り戻すための支援、心のケアへの支援などです。

津波被害を受けほぼ全ての財産を失った被災女性が、日常生活を行ううえで必要である物資支援を受けていない現状を知り、「えがおねっと」による女性ニーズに応えた「女性視点での被災者支援」が行われました。

4月28日、私は登米市内に設置された7箇所の2次避難所へ、仙台市内のNPO法人イコールネット仙台が行う「災害時における女性ニーズ予備調査」の見舞い訪問に同行しました。本市では、津波による甚大な被害を受けた隣町の南三陸町の被災者支援にあたっていたからです。

「困っていることはないですか？」という質問に、集まってくださった約200名以上の幅広い年代の被災女性の皆さんが、同じ内容の話をされたのです。

更衣室がないこと、朝昼晩と100人以上の食事の炊事当番があり大変なこと、女性専用の洗濯物干し場がないこと、必要な生理用品が十分に支給されないこと、洗顔フォームも手鏡もなく化粧品はぜいたく品とされていること、裁縫道具がなく支援物資の洋服のサイズ直しができないこと、サイズの合う下着が支給されないこと、などでした。女性だけが使用する物は、災害支援にあたっている男性には必要性も用途も日常に使われている物なのかも理解されていない、そう気づかされる内容だったのです。

5月5日、立教大学の萩原なつ子教授に「女性に必要な物資が届いていません。」とメールをしたところ、すぐさま電話があり「物資の提供を各方面に働きかけるので受け皿になる団体を作るように。ネーミングも忘れずに」というご指導をいただきました。

見舞い訪問に男女共同参画条例の策定委員も同行していたことから、早速条例策定委員による会の立ち上げの方向に動き出しました。

5月13日、本年4月1日に施行した男女共同参画条例策定委員女性有志による、被災者に笑顔を届けたいという想いを込め、委員が自らネーミングした団体「えがおねっと」が設立、女性視点による被災者支援を行うことになったのです。

市の後方支援のもと、避難所の中学生以上の被災女性全員に対し個別のニーズ調査を実施、ニーズに対応した支援の必要性について多くの個人や企業から賛同・協力を得て、5月下旬から7月にかけ300人弱の被災女性一人ひとりに、フェイス&ハンドマッサージ、化粧品、裁縫箱、手鏡、サイズが合う下着、生理用品などを提供することができました。

被災女性が言ってくださった忘れられない言葉があります。

「幸せです。避難所でこんな日がくるなんて考えられませんでした。」という涙ながらに言ってくださった言葉。「今まで要望した物資が届いたことがなく諦めていました。いつか恩返しができたらと思います。」そして「笑顔と生きる力をもらいました。」という言葉。また、避難所の男性の方々からは「避難所に来てから女性がこんなに笑顔になったのは初めて。女性が元気になることが復興には大切なことだね。」と言っていただきました。

女性だけが使用するものに対して理解している男性が少ないがために、避難所の女性が不要な我慢を強いられる現状がありました。その要因の一つとして、公の防災分野の意思決定の場に女性の参画が少ないことがあげられるのではないでしょうか。

防災・減災、災害対策、さらには復興対策に女性が積極的に参画することは、社会全体における男女共同参画が進むことでもあります。生活に密着し、子どもや介護、障がい者への分野に多岐にわたって活動している女性が参画できる環境が整備されることを願っています。

三浦徳美さんプロフィール

宮城県登米市職員。（平成19年4月～平成23年5月まで男女共同参画担当係長）登米市で設置した2次避難所において、南三陸町からの被災女性約400名に対し登米市男女共同参画条例策定委員有志とともに「えがおねっと」を立ち上げ、ニーズ調査を行いきめ細やかな支援を実施。
「えがおねっと」のホームページ（http://tome-egaonet.jp）を8月31日に立ち上げている。

被災地を見てきました
―4カ月半たった被災地―

7月29日、30日と2日間で、福島県の相馬市、南相馬市、および岩手県の野田村を視察してきました。4ヵ月半たった今、新幹線はすっかり元通りになっていましたし、大都市では、それほど地震の被害というものに目が行きませんでした。

しかし、一山越えて、海岸部へ行きますと、そこには町があった、漁村があったとはとても言いがたく、昔からそこは荒地だったのではないかと思うほどでした。相馬市の原釜漁港では、魚市場といっても屋根と柱だけしか残っていない、あるいは家が残っていても中はまだゴミがいっぱいであるなど、言うべき言葉を失ってしまうほどでした。地盤が沈下して水が引かない地域などはまだ手付かずのようでした。しかし、重機が少しづつ入っており、流れて出たゴミ(というか資材など)なども、分別して山を築いていました。また、道路は何とか復旧したようです。それでも、まだ船が多数転がっていたり、もとは田んぼだったところが、津波をかぶって荒地になり、草が生い茂っているところなどが目につきました。

また、北泉・萱浜では、東北電力の火力発電所と海水浴場がありましたが、海水浴場は跡形もなく、地盤沈下もしていました。素敵な建物などがあったそうですが、ほとんど流されてしまい、どうなるのか検討がつきません。火力発電所は、重機などが入っていましたが、波が6階建ての4階まで来たそうで、なかなか整理できていないようです。

30日に訪ねた野田村は、村の規模が小さいところです。しかし、魚市場など沿岸部の建物は全部なくなってしまい、船は1、2艘残して、全部波に持っていかれたとの事で、ウニ漁の季節なのに、できないと嘆いていました。しかし、野田村は漁業よりも農業が中心というところですので、問題は津波による土をかぶった田んぼです。塩入の土を除かないと、稲は作れないとの事です。

また、野田村では、サケの養殖場があり、そのまわりに集落がありました。今回は見に行けなかったのですが、養殖場は壊れ、住民も避難したままです。また、ホタテやワカメの養殖も行っており、被害がひどいとのことでした。

三陸鉄道も通っていましたが、線路を失ったり、土手が崩れたりで、復興のめどは立っていません。幸い、野田村の役場が、1階しか津波がこなかったので、比較的早く動くことができたそうです。また、コンビニエンスストアがいち早く店を開き、助かったとの事でした。

今回の大地震の特徴は津波です。私たちは38mの津波など経験したことはありませんが、阪神・淡路大震災と異なるのは、津波の影響です。地震だけのところは早く復興するのでしょうが、津波の被害を受けたところは、今後の街づくりをどうして行くか。今までの繰り返しでは、もはや通用しないということが、わかっているのではないでしょうか。もちろん、原子力発電所の問題は、それこそ50年単位で考えなければならないのですが、その他のところも、かなり難しいのではないかと思います。しっかりと、日本人全体で、支えていかなくてはいけないと思います。(佐)

福島県南相馬市原町区(萱浜、北泉)

海水浴場シャワー棟

東北電力火力発電所(南相馬市原町火力発電所)

海水浴場そばの道路

魚市場（原釜漁港）

海水浴場

岩手県野田村（写真上・左）

小金井市の防災対策

はじめに

２０１１年３月11日、皆様はどこにいらっしゃったでしょうか？テレビの画面に映される光景を見て、恐ろしさに身をすくめていた方も多いと存じます。そして、現在、東日本大震災の影響で、近くにある立川断層が危ないといわれて、危険だと感じている方もいらっしゃるでしょう。そこで、小金井市では、防災に対してどのような計画を立てているかについて、見てみようと思います。

1 小金井市の防災対策

小金井市では、災害が発生した時は、医師会や歯科医師会などと協力して、応急活動ができるように計画しています。また、米穀小売商組合の協力で、優先的に応急米を確保しています。この他にも、アルファ米、クラッカー、ビスケット、医薬品、毛布なども備蓄しています。

正しい情報を伝えるために、市立小・中学校に屋外放送無線を、そして市役所と東京都庁を結ぶ防災無線を設置しています。

自分たちのまちは自分たちで守るという意識のもと、25の自主防災組織が作られています。一時的な避難場所は、小学校や大学など20箇所ですが、広域避難場所は、都立武蔵野公園、東京農工大学、都立小金井公園、東京学芸大学、多磨霊園の5箇所です。

2 個人の備え

個人の備えは、家具の固定や消火器の用意、懐中電灯（電池の確保）、ラジオ、非常用持ち出し品の準備、お風呂の水を確保しておく、飲み水の確保、避難場所の確認、防災訓練の参加などですが、特に家族でバラバラのときにどうするかについて、しっかり話し合いをしておくことが必要です。小さいお子さんの場合は、保育園へのお迎えをどうするか、誰に託すかということを、しっかり決めておかなければなりません。さらに、枕もとに、靴やスリッパを備えておくと、ガラスなどが飛び散っているときも歩けます。

そして地震が来たら、まず身の安全を図り火の始末や窓や戸を開ける事、あわてて外に出ないようにする事、正しい情報を集める事、門や塀には近寄らない事などを注意し、ご近所の方たちと協力し合うことです。

特に女性の視点から見ると、ご近所の助け合いは、最も重要です。

3 2つの川

小金井市は2つの川、仙川と野川に囲まれています。過去25年間には浸水や土砂災害がありました。50ｍｍの雨が降った時の対策として、野川の河川改修や、下水道についても未配備の箇所に新しく配管を整備したり、雨水浸透ますの設置など集中豪雨の対策を進めています。もちろんこの2つの川は、水防警報の対象にはなっていませんが、十分注意する必要があるでしょう。また、地面の高低差もあるので、土砂崩れにも注意した方が良いと思います。

さらに、玉川上水もあります。川面からの高さはありますが、ゲリラ豪雨の時にどれだけ安全なのかはわかりません。注意が必要でしょう。

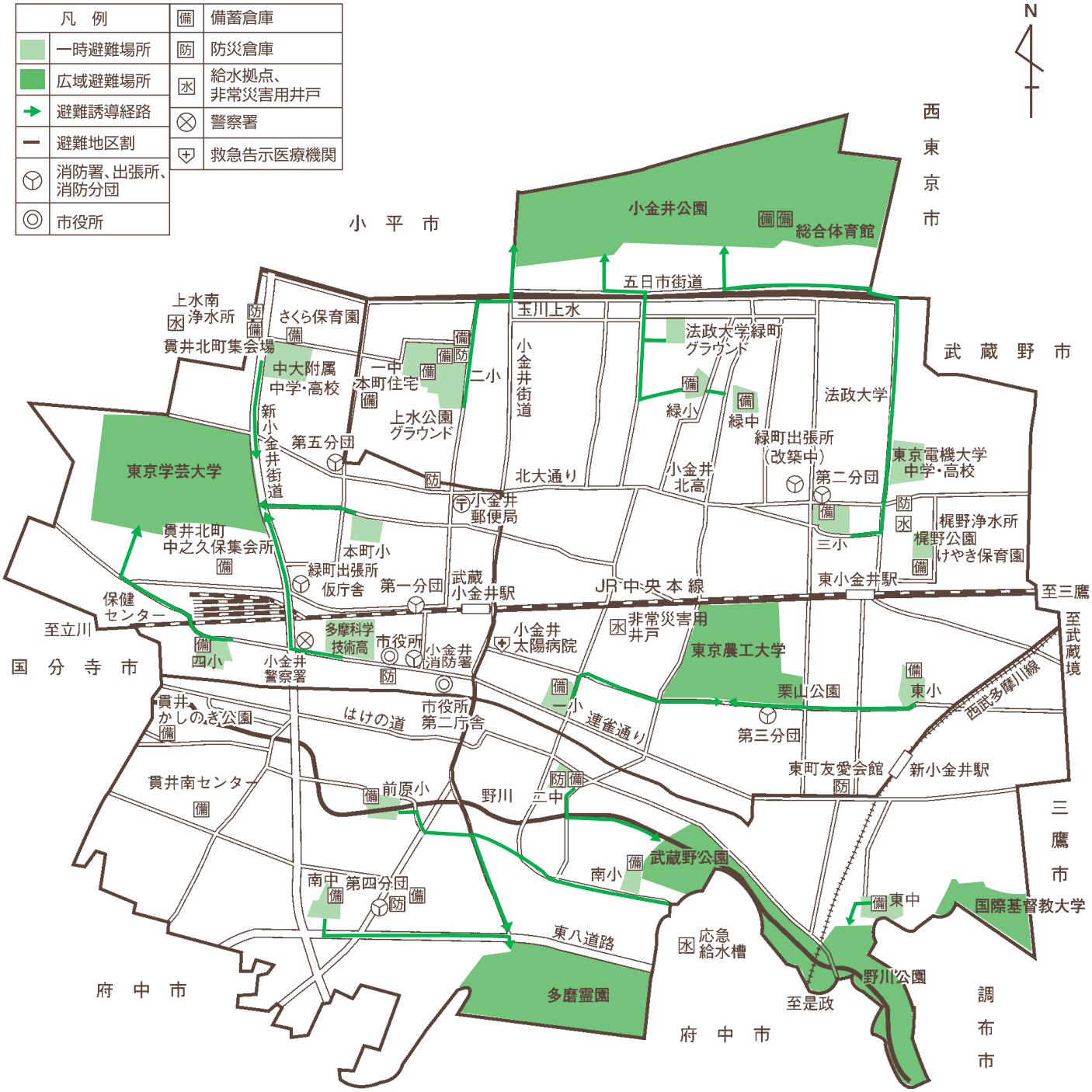
4 終わりに

小金井市では、「わたしの便利帳」で、避難場所を確認できますし、小金井市のホームページでも、防災計画を見ることができます。

東京直下型地震が来たときは、携帯やＰＨＳなどもつながるとは限りません。地震が来るときは、朝か昼間か、または夜かなどはわかりません。つまり、家族が一緒のときに来るとは限らないのです。ですから、そのときにどうするかを決めておかなければならないのです。帰れないということもあるでしょう。20年以内に大きな地震が来るとすれば、皆さんもご家族で一緒に考えておく事が必要になってくるでしょう。

また梶野公園のように震災に対応した公園がたくさんあれば、私たちも少しは安心できます。女性の視点からいえば、このような設備が各公園にあればよいと思います。小金井市でももっと防災に対して女性の視点を入れて作り直してほしいものです。防災訓練も女性の視点が必要になってくるのではないでしょうか。（佐）

小金井市防災地図


凡　例
一時避難場所
広域避難場所
避難誘導経路
避難地区割
消防署、出張所、消防分団
市役所
備蓄倉庫
防災倉庫
給水拠点、非常災害用井戸
警察署
救急告示医療機関
N
西東京市
小平市
武蔵野市
国分寺市
府中市
三鷹市
調布市
小金井公園
総合体育館
五日市街道
玉川上水
上水南浄水所
貫井北町集会場
さくら保育園
中大附属中学・高校
一中
本町住宅
二小
小金井街道
法政大学緑町グラウンド
法政大学
緑小
緑中
緑町出張所（改築中）
上水公園グラウンド
新小金井街道
第五分団
東京学芸大学
北大通り
小金井北高
第二分団
東京電機大学中学・高校
小金井郵便局
三小
梶野浄水所
梶野公園
けやき保育園
貫井北町中之久保集会所
本町小
緑町出張所仮庁舎
第一分団
武蔵小金井駅
JR中央本線
東小金井駅
至三鷹
保健センター
至立川
多摩科学技術高
市役所
小金井消防署
小金井警察署
小金井太陽病院
非常災害用井戸
東京農工大学
至武蔵境
四小
貫井かしのき公園
はけの道
市役所第二庁舎
一小
連雀通り
栗山公園
東小
西武多摩川線
第三分団
東町友愛会館
新小金井駅
貫井南センター
前原小
野川
二中
武蔵野公園
南小
南中
第四分団
東中
国際基督教大学
東八道路
応急給水槽
野川公園
多磨霊園
至是政

国際比較

海外からの支援

２０１１年３月11日に東日本大震災が発生してから、海外から多大な支援を頂きました。２０１１年９月14日付の外務省の統計では、１２４の国、機関から、物資、寄付金を含め１７５億円以上のご支援を頂きました。また、救助チーム・専門家チームも９月14日現在で、24カ国、３機関に上っています。そのほかにも、ＣＡＴＶをご覧の皆様ならば、お気付きになるでしょうが、番組の出演者たちが、「ミンナ友達」といって、日本に励ましの言葉をかけてくださいました。お見舞いの電報は世界各国から送られています。それも１通だけではありません。天皇陛下や首相、外相、それぞれの駐日大使館を含んでいます。皆さんも、「みんな友達」になって感謝するとともに、力いっぱい生きていきましょう。

＊救助チーム、専門家チームを送ってくださった国、地域・機関は、２０１１年９月14日現在で、次のとおりです。韓国、シンガポール、ドイツ、スイス、アメリカ、中国、イギリス、ニュージーランド、メキシコ、オーストラリア、フランス、台湾、ロシア、モンゴル、イタリア、インドネシア、南アフリカ、トルコ、イスラエル、インド、ヨルダン、タイ、スリランカ、フィリピン、国連、国連世界食糧計画、ＩＡＥＡ（食品モニタリングチーム）

※各国・地域のＮＧＯ、企業、個人等から多くの寄付や支援の申し出があるそうです。少なくとも16カ国、43のＮＧＯが来日していると外務省は見ています。（佐）

出所　外務省ホームページ

３月中に小金井市が実施した被災地への主な支援について

●岩手県北上市へ救援物資を送りました。

小金井桜を通じて交流がある岩手県北上市へ、救援物資として、粉ミルク、子ども用および大人用おむつ、生理用ナプキンを市役所職員が直接届けました。

●陸上自衛隊を通じて被災地へ救援物資を送りました。

陸上自衛隊練馬駐屯地へ、市の備蓄用品からブルーシート１０００枚を搬送しました。（ブルーシートは、自衛隊を通じて、被災地へ送られました。）

●市民の方々から寄せられた救援物資を東京都を通じて被災地に搬送しました。

●東日本大震災義援金の募金を実施しました。

お寄せいただいた義援金は日本赤十字社を通じて被災地に送金しました。（事務局）

梶野公園に出かけてみませんか

梶野公園は、2011年2月にオープンした市民参加により計画から活用まで考えて作られた公園（東小金井駅北口徒歩3分）です。小金井市環境政策課緑と公園係の石倉美樹さんに園内を案内して頂きました。

～自然のまま～

剪定をしない木々、自然樹形の大木は枝がおおらか、優しい風が吹いています。

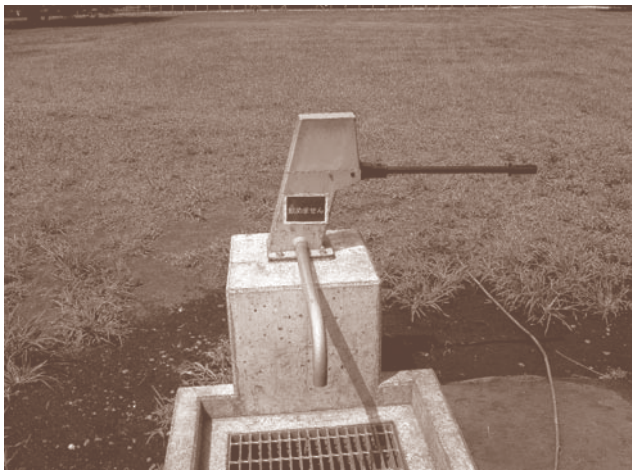
木登りもしやすそう。工事前にあった原っぱも、そのまま原っぱとして残されました。何となく癒される空間です。

～防災設備も～

手押し井戸が珍しいと思ったら、マンホールトイレへ水を流す秘密が隠されていました。そばに小さなマンホールが5つ、園内にある備蓄倉庫に洋式便座や簡易テントが保管され、トイレに早変わりします。

消防用貯水槽、かまどに変身するベンチ、非常用ライトとなる太陽光発電パネルも設置され、災害時の一時避難場所となっています。

耐震性貯水槽（100t）のふた部分


手押し井戸

～人の目が届く～

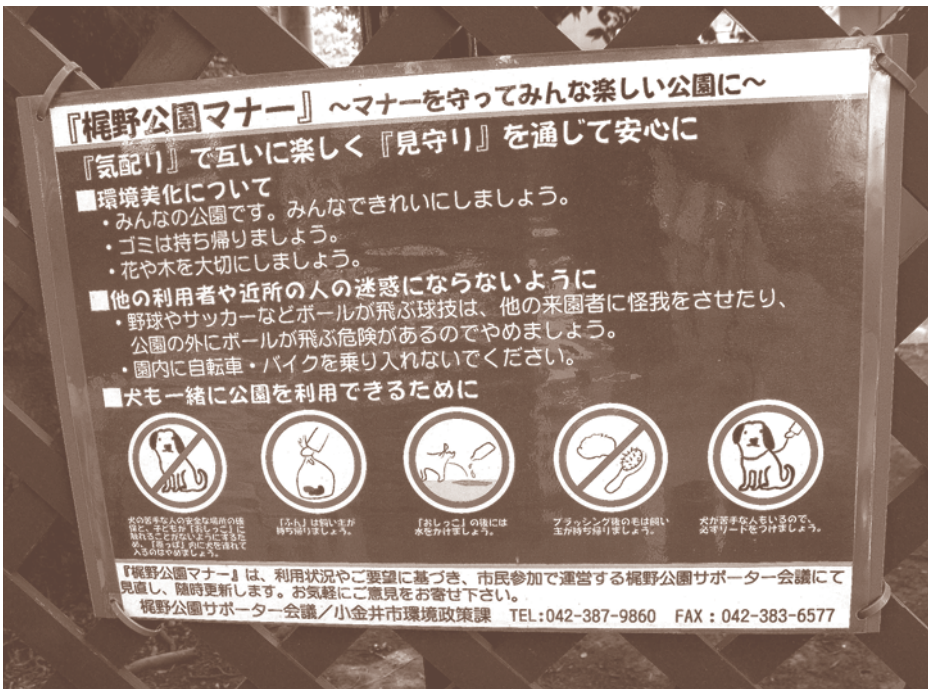
常設トイレはプライバシーと安全性を考え、天窓もあり明るくオープンな設計です。女性や子どもも安心して利用できます。ドアが15分開かないとブザーが鳴るそうです。

計画当初から市民の声を反映して作り上げた公園、今も市民が見守っています。「わんパトの会」メンバーは朝夕にワンちゃんと散歩、「花ボラの会」は季節の花を育て、「遊び場の会」は自然と遊ぶ、ちびっこプレーパークを企画しています。「広場の会」は、地元の老人会を主体にしたゲートボールを楽しむシニアの活動です。そして、公園を中心にコミュニティーが広がっています。

トイレ横に公園サポーターの集会室があり利用者の要望を取り入れながら、安心して憩える「我が公園」を目指しています。あなたも出かけてみませんか？

景観に溶け込む園内の建物の色、樹木を優先した街灯の高さ、ベンチは人の目の届く場所に。公園設計者は女性とのことで、納得ができました。（加）

各会からのお知らせ



小金井で働く 東京消防庁 小金井消防署 警防課長 澁谷博子（しぶや）さんに聞く

防災に直接かかわる消防署、力自慢の男社会と思いきや、小金井消防署では10人の女性消防署員が活躍しています。

今回は、小金井消防署警防課長の澁谷博子さんにお話を伺いました。

1 はじめに

澁谷さんは、今春4月1日付けで新宿消防署より異動されてきました。まず「消防署」の歴史と役割について伺いました。

東京消防庁は1948年に設立、各地に消防署が増設される中、1998年、国分寺消防署から分離し「小金井消防署」が開署されました。

小金井消防署の管轄区域は小金井市ですが、火災や救急出動時は隣接消防署で相互にカバーしあっています。お話を伺っている2時間ほどの間にも2回の救急車出動館内放送がありました。

消防署は救急・消火活動、防災指導・火災予防業務を日常的に行い市民の安全を守っています。加えて、建物を建築する際の建築同意（建築法令中の防火規定や消防用設備の図面審査）、病院・雑居ビル・大学・工場・ガソリンスタンド等への立入検査、火災原因調査、関連メーカーへの指導等、幅広い役割を担っています。

2 仕事のこと

澁谷さんが東京消防庁に入庁したのは1978年。当時は、東京消防庁全体で女性消防吏員は300名ほどでしたが、その後、男女雇用機会均等法が導入される等、今は約1000名程だそうです。

火災予防や立入検査がほとんどだった女性の仕事は、救急救命士等の資格取得など本人のやる気と努力で男女の差が無いほどに広がり、現在、小金井消防署員137人の内、女性は10人。内4人は救急救命士・ポンプ車の隊員等、24時間体制の勤務についているそうです。

男性と体力には差があるけど、採用・職域の拡大は進み、道は開かれていると感じているとのことです。既婚署員やママさん署員もいます。

3 直下型地震への備え

東日本大震災が発生した平成23年3月11日以降、消防署への期待は更に高まりました。緊急実働部隊は、ポンプ車6台、はしご車1台、化学車1台、救急車3台の各隊に加え、指揮車1隊も、毎日の訓練と点検を欠かしません。

5年前の都の防災会議で、阪神淡路大震災と同じマグニチュード7・3の直下型地震の被害想定が出されたそうですが、備えには自助・共助・公助があり、町会や個人での備え、地域コミュニティーも欠かせないとのことです。家具類の転倒防止を行ったり、AEDの操作をマスターする救命講習を受講したり、いざという時に備えて伝言ダイヤル（緊急時の安否確認）などを理解してほしいとのことです。

4 救急相談センター

緊急に病院へ行く必要があると思った時は迷わず救急車を呼んでもらいますが、救急車を呼ぶか病院に行くか迷ったら、救急相談センター#7119へ電話をしてください、との紹介がありました。#7119

を是非活用したいものです。

5 働き続けてきた思い

東京消防庁の女性消防吏員の採用は1972年が一期生であり、当時新分野の仕事でした。働き続ける女性先輩の姿もあり、仕事の範囲も広がってやりがいがある職場で、住民と直に接する仕事にやりがいを感じます、と明るくおっしゃる澁谷さん。具合が悪かった人から「女性隊員で安心できた」と言われたり、子どもたちやお年寄りへの火災予防説明では、女性ならではの柔らかさがあると言われたこともあったそうです。

あとがき

澁谷さんは姿勢の良い制服姿が印象的で、きびきびとしたお話しの中にも親しみが湧きます。

いちばん嬉しかったエピソードを伺ったところ、「防災の話で訪問した際、お年寄りがご本人の人生に触れる様々なことをお話しして下さいました。防災訓練など様々な場面での街の方、人との触れ合いが嬉しい」と語られた笑顔が素敵でした。

市民の安全を守る消防署は、市民に安心を届ける消防署員のいる所でした。（加）

「かたらい」は、公募による市民編集委員が、企画・取材・執筆を行っています。

編集後記

「男女共同参画」という言葉をご存知でしたか？女も男も平等に支えあえる社会をめざして、「かたらい」誌が多くの皆さんに読んで頂けますよう願っています。お友達に広めて頂けたら幸いです。（加）

「東日本大震災」の爪あとを見にいって、これは5年では復興は難しいだろうと思った。まず、地盤沈下が生じている所があり、地図が変わってしまっているところも多い。そのようなところは、元通りにはならないだろう。綿密な都市計画が必要であり、新しいデザインが求められる。もしかしたら、この地域は、今後大きく変わっていくかも知れない。そう考えると、希望が見えてきた。（佐）

今号では「女性と防災」を特集しました。東日本大震災の被災地支援を行っているお二人から寄稿を頂きました。この場を借りましてお礼申し上げます。（男女共同参画室）

かたらい34号

2011年（平成23年）10月発行

企画・編集：かたらい編集委員会

発　　行：小金井市企画財政部企画政策課
男女共同参画室
TEL：042-387-9853
FAX：042-387-1224

編集委員：加藤由喜枝　佐藤百合子
男女共同参画室

デザイン：水谷 香

監　　修：高橋道子（東京学芸大学）

表紙：福島県相馬市原釜漁港